

# 春さきの古物店

小川未明

青空文庫



ひろ  
 広やかな通りには、日の光が暖かそうにあたっていました。こ  
 の道に面して、両側には、いろいろの店が並んでいました。  
 ちようどその四つ辻のところに、一軒の古道具をあきなつてい  
 る店がありました。そこに、各種の道具類が置かれてある有  
 り様は、さながら、みんなは、いままで働いていたけれど、不用  
 になつたので、しばらく骨休みをしているというようなようす  
 でありました。

どんなものが、そこにあつたかというのに、まず壁ぎわには、  
 張り板が立てかけられてあり、その下のところに、乳母車が置  
 いてあり、その横に机があり、その他、火ばち・針箱・瓶とい

うように、いろいろな道具類どうぐるいが並べられてありました。

しかし、張り板いたと乳母車うばぐるまと机つくえとが、いちばんたがいに距離きよりが

近ちかかつたものだから、話はなしもし、また親したしくもしていました。彼かれら

は、このごろは仕事しごともないし、ただ空想くうそうにふけつたり、昔むかしのこ

とを思い出おもしたりしてゐるよりほかはなかつたのであります。

そのなかでも乳母車うばぐるまは、ちようど腰こしの曲まがつたおばあさんの

ように、愚痴ぐちばかりいつていたのでした。

「まだ、あなたは、その年としでもないのに、なぜそう愚痴ぐちばかりお

つしやるのですか。また、これから世よの中なかへ出でて、どんなおもし

ろいめをしないとかがりますまいに……。」「と、机つくえはよく、乳う

母車ばぐるまに向むかつていったことがあります。

すると、青いペンキのところどころはげ落ちた乳母車は、急に、元気づいた調子になって、

「ほんとうに考えればそうなんですよ。けれど、こうして、じつとしていきますと、つい気がめいりまして、しかたがないもんですから……。」と、乳母車は答えました。

「ああ、もうじき春がくるよ。そうすれば、おれたちは、きつとおもしろいことがあるだろう。そう長いことでもあるまい……。』と、張り板が、身柄相応な大きな声を出して、口をいれました。今日も、乳母車は、日のあたたかそうにあたって、黄色なほこりが、人間の歩くげたのさきから、また荷車のわだちの後から起こるのを見ていました。が、いつしか、いつものごとく訴え

るような調子で、

「わたしにも、おもしろいことも、おかしいことも、ありました  
つけ。あれはどことだつたらう。いい音楽の聞こえてくる坂道  
を、赤ん坊をのせて登ると、そこには桜の木が幾本もあつて、  
みごとに花が咲いていました。吹いてくる風は、なんともいえず  
気持ちよかつたし、いつまでもその木の下で遊んでいました。  
もう一度あんなところへいつてみたいと思います……。」

乳母車は、語るともつかず、ひとりで、こういつて、空想  
にふけつてしていると、

「乳母車さん、あなたが、昔のことをなつかしがりなさるのも、  
無理はないが、だれにだつて、そうした思い出というようなもの

はあるものです。しかしそれがどうなるものでしょうか？」と、  
 机つくえがいました。

乳母車うばぐるまは、机つくえのいったことは、耳みみにはいらず、なにかいっし  
 んに沈しずんだ顔かおをして考かんがえていました。

このとき、突とつぜん然ぜんにも、壁かべに寄よりかかっている張はり板いたが口くちを開ひら  
 いたのです。

「机つくえくん、君きみにも、なにかそんなはなやかな思おもい出でがあるのかね。  
 君きみの姿すがたを見みたのでは、どんきな虐ぎやく待たいを人にんげん間かんから受うけてきたか  
 と思おもわれるくらいだ。僕ぼくは、また君きみこそ、過かこ去この苦くつう痛うの連れんぞく続ぞくで  
 あつて、こうしてのんきにしていられるのが、どんなに君きみにとつ  
 て幸しあわせ福ふくのことかしのれないと思おもったが、やはり、昔むかしが恋こいしいとみ

えるのは不思議なくらいだが……。」「と、張り板はいつたのでした。

つくえ 机は、感慨深そうな顔つきをして、張り板のいうことに耳を傾けていました。

「そう思われるのは、無理はありません。この体をしていては……。」「といいました。

なぜなら机の四つ角は、小刀かなにかで、不格好に削り落とされて円くされ、そして、面には、縦横に傷がついていたのであります。張り板がその過去に、どんなひどいめにあわされてきたかと疑ったことに、すこしのふしぎもなかったからです。しかし、机はそのことについて語りはじめました。

「もと私はわたし、なかなかりっぱな机つくえでした。その時分じぶん、お嬢さまはじょう、私の前わたしまえにすわって、歌うたをお作りなされました。お嬢さまは、夏なつの山路やまじという題だいについて、秋あきの野原のほらという課題かだいについて、虫むしや、露つゆについて、また雨あめにぬれた花はななどについて、どんなにかぎりない美しい空うつく想くうそうを、私の前わたしまえで読よみ、歌うたわれたかしれません。そして、あるときは故郷こきようを思おもい出だしては、悲かなしいやるせない、それは、私わたしには、あまり微妙びみょうでいいあらわせないような、もつとも尊そんち重ようされなければならぬ感かんじよう情じようを、私わたしにばかり、惜おしげもなく見みせられたかしれません……。このことは、あなたたちには、まったく、想像そうぞうのつかないことです。」といたしました。

「それなのに、なぜ君きみは、そんなかたわ者ものにされたんだね。」

「まあ、聞いてください。お嬢さまが結婚なされたときに、私もいつしよに、お伴をしてまいりました。どうです、私は、それほどのお気にいりであつたのでした。そのうちに、坊ちゃんが生まれしました。坊ちゃんが三つするとき、なにかのはずみにあやまつて、私の角で頭をお打ちになつたのです。すると、気の短いご主人は、なにか私が悪いことでもしたように誤解されて、前後の考えもなく、腹だちまぎれに、私の四すみの角をみんな小刀で削り落としてしまわれました。そのときから、私は、こんなかわ者になつたのです。それからというもの、私は、なにかにつけて手荒く取り扱われましたが、しまいには、大きくなつた坊ちゃんのために、またこんなに面にまで傷をつけられてしまいました。

しかし、それまでの、長い間の栄華な生活を思い出せば、私は、しあわせのほうで、なにも、うらむことはないのです。と、机は答えました。

張り板は、なんと思ったか、あざ笑いました。

「あなたが、こんなように、角を削り落とされずにいたなら、こへは、まだおいでにならなかつたでしょう……。みんな、運命というもんでしようね。」と、乳母車がいきました。

「うらむ、うらまないといつて、もう二度と君は、栄華の日を見ることはあるまい。」と、張り板がいきました。

「ほんとうに、あるとき、坊ちゃんがころんで頭を私の角で打ちさえしなければ、こんなことにはならなかつたのです。」

「わたしも、やはりそうなんです。引ひつ越こしのときに、私わたしの小さちいな体からだでは、無理むりなほど重おもい、大きおおなものものを積つみ重かさねられましたので、そのとき、体からだの具ぐ合あいをいけなくしてしまつたのです。もうすこし、私わたしの身みを思おもつてくれたらと思おもいますが、今いまとなつてはしかたがありません。また、そのうちには、いいこともないとかぎりぎりますまいから……。」と、乳母車うばぐるまはいいました。

「そうだ。おまえさんなどは、そうおいぼれたばあさんでもないから、春はるになつたら、どこへか売うれ口くちがないものでもない。」と、脊高せだかな、口くちだけは達者たつしやであるが、そのわりに能のうのなさそうな張はり板いたはいつたのです。

「張はり板いたさん、あなたはどうか。私わたしどもから見みれば、あ

あなたは、しごく、のんきなように見えませんが、それでも苦勞はありますまい。」と、机は、張り板に向かつて、たずねました。

「おれには、なに、苦勞なんかあるものか。おれみたく、みんながのんきに暮らしていれば、べつに悲觀することもないのだ。せま苦しい家の中にいるときはべつだが、いつも天氣のいい日は外に出て、通る人間をながめたり、あたりの景色をながめているのさ。病氣をしてみたいと思っても病氣のしようがないのだ。」

「それで、退屈はなさいませんか？」と、乳母車がやさしい声できいたのです。

「元來おれなどは、怠け者だから……なにを見てもおもしろい

ね。とんぼの飛ぶのを見ても、犬がけんかをするのを見ても、子供が輪をまわして遊ぶのを見ても……。だから、退屈はしたことがない。」

「そうでございますか。」

「ここで、こうして、おたがいに仲よくなったのですから、たえここを出てしまつても、おたがいに幸福に日を送りたいものですね……。」と、机が、いまさら感じたらしくいいました。

「ほんとうに、そうでございます。いつまたみんなが、一つところに落ち合うこととでございましょう?」

「いや、もうけつして、落ちあうことはありませんまい。」

このとき張り板は、からからと笑いながら、

「だれに、明日あすのことがわかるもんか。しかし、悪わるくなつたつて、よくなりつこはないだろうな。なぜつて、こうして、骨休ほねやすみをしている楽らくにこした、楽らくはあるまいからな。机つくえくんなどは、こんど働はたらきに出でれば、きつと重おもいものの台だいにでもなるだろう。そうすれば、一いっし生しょう浮うかぶ瀬せがない。乳母車うばぐるまさんだつて、どうせ楽らくな日ひはありつこない。まあ、こうして、一日いちにちでも長ながくいられるにこしたことがない……。」「といたしました。みんなは、なるほどそうかなと考かんがえられたのです。

一日じつ、客きやくがこの店みせにはいつてきました。主人しゅじんは、なにかその客きやくと話わをしていました。張はり板いた・机つくえ・乳母車うばぐるまは、めいめいに自分ぶんが買かわれてゆくのでないかと、胸むねをどきどきさしていました。

それは、不安ふあんなうちにどこか明あかるい希望きぼうのあるような感じかんでもありません。

そのうちに、主人しゅじんは、一方ほうのすみの方ほうから、手てを延のばして、あまり大おおきくないものをつかみ出だしました。みんなは、それがな  
 んであるかと目めを向むけますと、鼻はながねずみに食くわれて欠かけていた、  
 古ふるいひな人にんぎよう形かたちでありました。いつか、みんなは、この人にんぎよ  
 形かたちが仲間なかま入いりをしたときに、大おおいに笑わらったものです。その後ご、  
 その存そんざい在ざいすら忘わすれられていたのです。客きやくは、どういふつもり  
 か、その人にんぎよう形かたちを買かってゆきました。

店みせさきが、ふたたび静しずかになつたとき、みんなは顔かおを見合みあわせ  
 て、いまさら運命うんめいというものの不可思議ふかしぎを考かんがえさせられたので

あります。

— 一九二五・一二 —



# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 5」講談社

1977（昭和52）年3月10日第1刷発行

初出：「赤い鳥」

1926（大正15）年3月

※表題は底本では、「春《はる》さきの古物店《こぶつてん》」  
となっております。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：雪森

2013年5月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 春さきの古物店

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>